

露伴全集附錄

露伴全集
附錄

露伴全集 附録

一九八〇年二月一九日 第一刷発行 ©

定価二二〇〇円

編者

谷沢永一
肥田皓三
浦西和彦

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二十五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三六五四二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序 言

幸田露伴に心を寄せる讀者の爲に、讀める資料集を志して此の一冊を編んだ。露伴自身『冬の日抄』の引に、「人の書を讀むに當つてや、其咀嚼玩味の時、即ち是怡然として樂み、莞爾として悦ぶの時なり」と言う如く、味讀の悅樂に資料かならずしも必須ならず、研究や穿鑿より寧ろ直接の親近と參入こそ讀者の選ぶところであらう。ただ僅かに露伴その人の風貌姿勢および文學的閱歷をめぐつて、鬱然たる巨人の面影を偲ぶよすがとなり得れば幸いである。

當初は昭和二十四年版全集月報の抄出再録に、露伴批評研究史を加える案もあったが、より勞多くとも讀者に一層の興を呈すべく、直接證言としての同時代評を摘出して、それに參考文獻一覽を添え、批評研究史は讀者胸中の醸成に俟ちたいと考えたところ、幸いに編集部の評同を得たが、その替り採擇構成のすべて一任という重責を負う結果となった。本來ならその任に非ずと辭退すべきところ、露伴敬慕の情にかられるあまり、非力を忘れて着手した輕率をお許しいただきたい。資料探索に未練深く、刊行を大幅に遅らせたのも、ひとえに私達の怠惰ゆえである。

第一部「昭和二十四年版
露伴全集月報抄」は、蝸牛會編纂月報全號掲載諸文の抄出、肥田皓三の原案に基づく。原則としては、その後著作として纏められ別のかたちで閲讀可能となっている文章を省き、現在

では一般の目に觸れにくくなっていて、且つ露伴の各側面を出来るだけ多様に照らしたす諸文を選び、各號の後記「編纂室より」から、全集編纂方針および挿繪に關する説明を抄出した。第二部、露伴の人物および作品に對する「同時代の批評・紹介」は、肥田皓三の蒐録を基礎に浦西和彦が増補した。紙幅制限のため明治二十三年の「風流佛」から大正四年の「悅樂」に至る期間に限り、所收文は露伴に言及した部分の採録を原則とし、明らかな誤植はごく小部分訂正した。新刊案内の類いや長文にわたるものを割愛しながら、努めて各作品におよぶべく心がけ、今では閲讀の便に乏しい文章を主とした。所定の頁數に收めるため採録を見送った諸文は、第三部の浦西和彦編「參考文獻」に掲出した。

限られた期間内に全力を盡したつもりであるが、書誌調査に完璧は實現し得ず、幸い各位の御叱正により、増補の手がかりを與えられるようお願いしたい。

谷澤 永一
肥田 皓三
浦西 和彦

〔補記〕 本書は昭和五十四年八月に昭和五十三年版露伴全集の附録として刊行されたものであるが、同全集の予約購讀者以外の方々から少なからぬ入手希望の聲が寄せられてきたため、全集とは獨立した單行の書物として刊行することとした。(岩波書店編集部)

目次

昭和二十四年版
露伴全集 月報抄

目次

露伴の史傳について	中野好夫	露伴と狂言	古川久	三
露伴と中國	石田幹之助	露伴の短詩提唱	朝倉治彦	二
「運命」傳説について	武内義雄	露伴の理學好み	飯島衛	三
連環記	植村清二	天うつ浪と星	野尻抱影	三
劇詩「名和長年」	獅子文六	英雄傳評語偶感	河野與一	三
露伴の紀行文	河竹繁俊	「ひげ男」「五重塔」	幸田玉	三
「三人冗語」と「雲中語」	田部重治	「椀久物語」の劇化	安藤鶴夫	三
露伴と忍月	高橋義孝	悲願「五重塔」	佐佐木信綱	三
露伴と子規	石橋貞吉	* 幸田さんの思ひ出	横山大觀	三
露伴と根岸黨	柴田宵曲	露伴さんの思ひ出	古島一雄	三
露伴と紅葉	丹羽愛二	露伴、子規、魯庵	木村義雄	三
露伴と西鶴	勝本清一郎	露伴先生の將棋	戸板康二	三
	朝倉治彦	名刺の裏の文字	小西茂也	三
		お葬式の日	森銑三	三
		聞いた話		三

小説「玄關」の露伴

夫人のことなど

釣、料理

露伴先生の思ひ出

幸田先生を憶ふ

二人の翁

露翁几邊志―用印のこと―

資料

學海日録抄

露團團序

西鶴の墓

明治二十三年日記抄

第四青年文學會景況

草鞋記程緒言

伊勢の旅

明治二十七年三月十六日會誌

みづの上

露伴宛書簡二通

露伴

柴田宵曲 五

倉本清太郎 五

川口 陟 五

植竹喜四郎 五

八波則吉 六

土橋利彦 六

松下英麿 六

依田學海 七

依田學海 七

木崎好尙 七

坪内逍遙 七

奥 泰資 七

高橋太華 八

高橋太華 八

樋口一葉 八

饗庭篁村 八

齋藤綠雨 八

田岡嶺雲 八

田岡嶺雲 八

古今小説談

露伴、紅葉、逍遙、鷗外

幸田露伴氏の一家

欣賞會記事

露伴翁

露伴の出世咄

紅葉と露伴

明治初頭文壇の回顧

饒舌録

幸田露伴と亡父天心の釣

明治大正偉人の片鱗 幸田露伴

白日下の涙

幸田露伴氏

秋風鱸魚

東京英學校時代

谷中の家

勝海舟 五

中江篤介 五

三村清三郎 六

徳田秋聲 六

内田魯庵 六

田山花袋 六

市島春城 六

谷崎潤一郎 七

岡倉一雄 七

田村松魚 七

沼波瓊音 七

薄田泣菫 七

安成二郎 七

柳田 泉 七

幸田成友 七

一三

編纂室より

同時代の批評・紹介

新著百種第五號風流佛	肉食頭陀	一七	露伴と忍月に寄す	寧齋主人	一七一
新著百種第五號風流佛批評	落花漂絮	一〇	新年前後の諸作〔浮世談義〕	忍月	一七二
露伴子の「風流佛」	其川子	一五	筆はじめ〔浮世談義〕	大橋乙羽	一七三
奇男兒	稜骨子	一五	文使と聖天様	大橋乙羽	一七三
昨年の名作〔風流佛〕	雜體子	一五	四天狗探梅の記	忍月居士	一七四
詩月旦〔風流佛 毒朱唇〕	三味道人	一五	露伴子	吉田香雨	一七四
露伴子	撫象子	一五	風流魔に引す	思軒居士	一七五
葉末集	萩の門忍月	一五	風流魔を讀みて	學海老人	一七五
葉末集	思軒居士	一六	丹波太郎右衛門さまにまゐらす	蘆賀はな子	一七六
偶書	天真生	一六	露伴の『二宮尊徳翁』を讀みて	正太夫	一七六
幸田露伴子を訪ふ	寔字居士	一六	二宮尊徳翁	藏風子	一七七
舊露伴死し新露伴生る	萩の門忍月	一六	家庭讀本たからの藏〔廣告〕	〔坪内逍遙〕	一七九
國民之友夏期大附録〔二口劍〕	不知菴	一六	小説五重塔		一八一
一口劍を讀む	玉兎生	一七	郡司大尉と幸田露伴		一八一
一口劍に對する予の意見	微笑子	一七	風流魔及び二日ものごと		一八二
露伴子に與ふ〔二口劍〕			小説漸く起る	風潭坊	一八三
詩月旦〔葉末集ほか〕			氣運已むべからず		一八三
			小説、初陣		一八三
			今年の傑作〔風流徵塵藏〕		一八三
			枕頭山水		一八四
			文學者の動靜〔きくの濱松〕		一八四

洒落本研究會

話し振り 幸田露伴

横 鍵

文士の近郊生活 幸田露伴氏

蝸牛庵夜譚

初対面の文士

諸家文章短評 幸田露伴

明治の小説家 とりとく評

文藝 雑事

文界と人 四迷と露伴

潮待ち草(廣告)

註釋二日物語(廣告)

小説はるさめ集(廣告)

世に迎られた本 幸田露伴の天うつ浪

露伴叢書 前編

文藝 雑事

文壇の人の風 幸田露伴氏

文章より見たる現代の小説

頼 朝(廣告)

明治文壇に於ける幾多の光景

紀行文の種々相

努力論(廣告)

文藝 雑事

洗心録(廣告)

悦 樂(廣告)

幸田博士の『悦樂』を薦む

参 考 文 献

一 單行本

二 著作・著書目録

三 年 譜

四 (參考文献目録・研究案内

五 註釋・注解

六 論文・エッセイほか

屋上土生

二四〇

二四九

二五〇

二五〇

二五〇

二五二

二五二

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

二五三

昭和二十四年
伴全集版
露

月

報

抄

露伴の史傳について

中野好夫

露伴のいはゆる史傳と呼ばれる一連の作品は、傳記でもない、小説でもない、さりとて開き直つて評論といふでもない。「蒲生氏郷」の書出しに、「歴史家くさい顔つきはしたくない。傳記者と囚はれて終ふのもうるさい。(中略)おほよそは何かしらに據つて、手製の萬八を無遠慮に加へず、斯様も有つたらうといふだけを評釋的に述べて、夜涼の縁側に團扇を揮つて放談するといふ格で語らう。」とあるやうに、まことに奔放無碍、颯颯として溜飲の下るものである。これで案外私は、露伴臨終に近く氣紛れなジャーナリズムが、何思つてか俄かにヤイノヤイノと騒ぎ立てる大分前から、この史傳物の愛讀者だつたのである。ことに大好きなのは「蒲生氏郷」だ。これはもう發表の時から數度は讀んでゐる。ことにあの黒川の前野における茶譚の一條の如きは、なんのことはない、わが朝に見る鴻門の會といふところ。とにかく登場人物が氏郷に政宗といふ大怪物、露伴のいはゆる「火の玉だましひ」だ。氏

郷出陣の跡をつける政宗、これほど世にも油斷のならぬ送り狼があらうか。張り扇とも高等講談ともいはゞいへ、この兩雄の對峙、露伴の氣骨を外にして誰が書けよう。

露伴の史傳物でうれしいのは、「頼朝」といひ、「爲朝」といひ、「平將門」といひ、氏郷といひ、「武田信玄」といひ、「今川義元」といひ、とうてい一筋繩の人物でない。再び言ふが「火の玉だましひ」だ。なるほど私たちは、近代文學が英雄よりは凡人、豪傑よりは小人、いやもつと適切にいへば、英雄をさへ小人に引き下すことに快哉を送るものであることは、よく知つてをり、あなたがちまたそれを墮落とも衰退ともいきまくものではないが、さればとて當代に於ける英雄豪傑的氣魄の凋落も悲しい。「秀吉、家康は勿論の事、政宗にせよ、氏郷にせよ、少し前の謙信にせよ、信玄にせよ、……鐵と火の世の中に生れて來た勝れた魂魄はナマヌルな魂魄では無い、皆いづれも火の玉だましひだ、……來年卒業證書を握つたらそ子嬢に結婚を申込まうなと思ひ寐の夢現七三にへばりつくのとは些違つてゐた。」その上、も一つ嬉しいのは、ケチな引下げ流の史傳家輩をクソミソにこなしつけてゐるこ

とだ。秀吉の氏郷毒殺といふ俗傳を否定して、「何で氏郷に毒を飼ふやうな卑劣狭小な心を有たう。太閤はそんなケチな魂を有つては居ぬ人と思はれる。」といふのなど、考證家はしらず、文學としては、この信じこむ心、惚れこむ心は限りなく貴いのだ。「九尺梯子は九尺梯子で、後の太平の世に生れて女飯を食つた史傳家輩は、元龜天正の丈高い人を見損ふ傾がある。」あながち史傳家輩ばかりへの罵倒でもあるまい。

露伴と中國

石田幹之助

鷗外も漱石も漢學の素養が十分あつた。然し露伴は漢學——といふか Sinology といふか、中國の古典や文物に關する知識造詣に於いては前二者よりも遙に廣く且つ深いものがあつた。鷗外にも漱石にも所謂漢學の素養が或は明瞭に、或は暗々裡に、その作品の上に表はれてゐることは色々あらう。材を漢土に取つたものも漱石にこそ無いやうであるが鷗外には「寒山拾得」とか「魚玄機」とか二三はある。露伴に至つては中國を舞臺にした小説や戯曲が相當にあるばかりでな

く、中國の事物に關する考證や講説や隨筆などが非常に多い。今全集が手許にないからの確なことは云へないが、座右にある五六の書と記憶とに據つて數へて見てもかなりな數に上る。小説には大作「運命」があり、戯曲には蒙古の勃興・デングス汗の誕生を取扱つた一聯の作品「不兒罕山」・「清系緣起」・「憤恨種子」・「怪傑誕生」の四篇があり、小品小話の類には初め「幽情記」に收められ、後に「運命」を加へて「幽秘記」と改題された書に録された諸篇があり、就中趙子昂・管道昇夫妻の仲を記した「泥人」、周櫟園とその愛姬王氏との纏綿の情を述べた「狂濤艷魂」、錢謙益とその妾柳如是との綢繆の生活を敍した「共命鳥」の如きは私の愛誦措く能はざる所である。歴史物語としては明末薄命の天子崇禎帝一族の最期を語つた「暴風裏花」があり、西南の奥區古今の沿革を述べた「雲南」があり、隨筆的な考證には「釣車考」・「支那の文學中の衣服の色」などがあり、プランセットに依る巫女の口寄せの如き扶乩の術や紫姑神に關する研究なども教へらるる所の多かつたものである。講説とも名づくべきものには「古支那文學に於ける小説の地位」・「道教思想」・「神仙道の一先人」・「仙書參同契」・「墨子」・「畫題と

しての詩仙」の如きがあり、その蘊蓄の廣さと深さとは何人も讃嘆を禁じ得まいと思ふ。その他近年長短とりどりの論考を収録して梓に上された「骨董」・「游塵」・「詩話」の三書に見えるものなどは、比々として殆ど皆中國關係のものにあらざるなしの概がある。

○

私などはこれらの諸篇から教へられるのみで之を論ずるなどといふ資格を缺くものであるが、假にその一端に就いて感想を綴るとしても限られた紙幅ではその百一をも盡し難い。茲には僅にその一二を録して新修全集の編纂室への約を果たす料としよう。

第一に驚くことは先生の學問の博いことである。深いことも勿論であるが、先づ目を瞪るのは知見の淵博富贍なことであらう。例へば前掲の「釣車考」などにして、先生は夙に深く釣を嗜まれ、その道の通であられたからでもあらうが、あの皮日休や陸龜蒙の詩の片言隻句から、それこそ釣糸を手繰り寄せたるやうにそれからそれと證徴を求めて遂に唐代既に今日のリールの如きものの存したことを道破せられたあたり、眞に博覽洽聞の士でなければ企及し能はぬ底のものがある。其後の一聯の考説「漁父詞の作者」・「唐末の詩人杜荀鶴」にも釣に關する事項があり、その邊は正に先生の獨擅場であり、「幻談」に發揮せられた釣師の心境や垂鉤弄竿の體験が巧みに生かされてゐて、歴史研究法の生きた手本としても乾燥無味な講壇の談義に優るもの萬々であらう。「溫飛卿」に見える七絶の新解の如き、この意味に於いて先生を待つて初めて之を期すべきものと思はれる。その他何れの論考を取つて見ても、經・史・子・集究めざるなく、加ふるに佛典に通じ、道藏を讀破してをられるやうな先生にして初めて能くすることを得るものばかりで、獨りこれは中國に關するものばかりではないが、何よりもその造詣の廣いのに頭を下げざるを得ない。尤も如何に先生と雖も、一から十まですべて初めから先生自ら拾ひ出された事例ばかりではない。例へば「文學三題斷」の一つ、「勸進帳と東坡居士と新宮」に擧げられた辨慶の苦肉の策の類話など、趙翼の「陔餘叢考」(卷二十)などにはすつかり之を集めてあつて必ず先生も之を利用されたことと思はれるが、私どもの驚くのは先生がそこに元の陳彥高の隨筆をも引用してをられることで、そこまでは大抵の人には期し得られない所であらう。而も先生の筆は巧みに之を纏められて極めて氣のきいたも

のとなり、趙書の如き、ただ事實を羅列したものなどの及びもつかぬものとなつてゐる點なども敬服に堪へないもの一つである。

○

もう一つ云ひたいことは先生が Sirolse や東洋史の専門家も跼足なくらゐ、新資料の發見や刊行などに深い注意を拂はれ、人一倍早く新しい知見を持つてをられたことである。「潮待ち草」には明治三十八年に書かれた殷の都跡から發掘された龜甲獸骨の卜辭のことが載つてゐるが、卜辭の拓本が附印されて初めて世に出たのがその前年である。先生は既にその書劉鐵雲の「鐵雲藏龜」に據つて之を論じてをられるが、我が専門家でこの年この書を見てゐた人が何人あらう。また先生は早くから蒙古史に興味を持つてをられたやうであるが、(さればこそ「龍姿蛇姿」に收めた前掲四篇の戲曲などもあるわけであるが) 宋の彭大雅が勃興當初の蒙古王廷に使した時の見聞記「黑韃事略」の如きをいち早く注目せられ、中國で「問影樓輿地叢書」が初めて之を上印するかしない頃、特に一寫本を求めて之を刊行されたことなどは(明治三十六年)その達識に服せざるを得ない。今でこそ東洋史の學徒は東西を

問はずこの書に親んでをり、王靜庵の附註校刊本の如きが得易くなつてゐるが、四十五年の昔に於いて、この書は僅かに大藏書家の架間に一二の寫本を存するのみで、世間殆どその價值を知るものはなく、その名すら知れ互つてゐなかつた時代として、先生にこの擧のあつたことなどは特記しておいてもいい所であらう。

露伴先生と道教

武内義雄

元曲研究の先驅者といはれる露伴先生はまた道教研究の開拓者でもあつた。先生の道教研究は單行の著作をなすにはいたらなかつたが、折にふれて發表せられた論文「道教に就いて」「道教思想」「仙人呂洞賓」「活死人王害風」「仙書參同契」「神仙道の一先人」などによつてその梗概をうかがふことができる。中にも「道教思想」の一篇はその敍説とでもいはるべきもので道教に關する先生の識見を窺ふに都合のよい文獻である。

先生は最初に道藏——道教關係の文獻をあつめた一大叢書で佛教の大藏經に比すべきもの——の内容を吟